

氏名	サノ 佐野	タカシ 隆		
学位の種類	博士（音楽学）			
学位記番号	博音第159号			
学位授与年月日	平成21年3月25日			
学位論文等題目	〈論文〉コンペールのシャンソンにおける調的特性の考察			
論文等審査委員				
（論文審査主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	片山千佳子
（論文審査副査）	〃	〃	（〃）	土田英三郎
（〃）	〃	准教授	（〃）	大角欣矢
（〃）	慶應義塾大学	非常勤講師		今谷和徳

（論文内容の要旨）

15世紀終わりから16初めにかけて、世俗音楽の変化の時代であった。定型詩によるブルゴーニュ・シャンソンから、パリ・シャンソン、イタリアのフロットラやマドリガーレへと展開してゆく時期に当たる。この時期の世俗音楽を代表するのがロワゼ・コンペール（c. 1445-1518）である。当時フランス・シャンソンが好まれていたイタリア、16世紀半ばにパリ・シャンソンを生み出すことになるフランス宮廷などでコンペールは活躍し、この両国の世俗音楽の展開に深く関わっていた。本論文では、世俗音楽の変化の時代に大きく関わった音楽家コンペールのシャンソンを対象とし、その調的特性を考察する。

この時期の多声音楽を扱う場合これまでは、旋法性を用いて分析、理解することが広く行われている。しかし、単旋律聖歌の分類法である旋法を多声音楽に応用することで生じる不都合は多くの議論を呼び、現在においても一般的理解が得られるには至っていない。多声音楽の旋法性に関する不都合は、すでに13世紀のアムルスによって認識されていた。その後ティンクトリス（15世紀終わり）、アーロン（16世紀初め）などの理論家により、多声音楽の旋法性の問題は議論されてゆき、ティンクトリスに始まる考え方である、テノル声部を最重要な声部と見なし、テノル声部の旋法を多声楽曲全体の旋法と見なすという概念が広まっていった。

テノル声部を楽曲全体の旋法と見なす考え方に関しては現代でも議論が続き、さまざまな研究がなされている。代表的なものとしては、マイアー（1974）の正格・変格の組による旋法を多声音楽の中に認めるもの、ダールハウス（1967）の正格・変格の全体的な旋法とみなすもの、パワーズ（1981）の調性型などがある。どれも当時の理論書などを参照し、事例に照らし合わせながら論理を組み立てているが、決定的な理論とはなっていない。

これらに対して、多声音楽に対する新たな分類方法がジャッド（1994）の ut、re、mi の調性である。ソルミーゼーションを応用し、旋法ではなく3つの ut、re、mi を終止音とする、相対的な音程配列の調性へ分類した。この分類を用いることで、さまざまな解釈の可能性があった多声音楽の調的特性を、わかりやすく理解、整理することができる。

このジャッドの3分類を用いてコンペールのシャンソンの考察を行った。その結果、コンペールのシャンソンには mi の調性がないこと、re の調性が多いことなどが判明した。mi の調性は宗教曲との関連が深く、世俗曲にはあまり用いられなかったこと、コンペールの ut の調性のシャンソンに、新しい世俗音楽の特徴が現れていることなどがわかり、ut、re、mi の調性の、この時期の音楽への応用の有効性ととも、コンペールの世俗音楽におけるこれまで以上の重要性が明らかになった。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、15世紀後半から16世紀初頭にかけて活躍し、この時期の世俗音楽を代表する音楽家、コンペールLoyse Compère (1445頃-1518)の48曲のシャンソンについて、C. C. ジャッド (Ph. D. 1994)の「Ut、Re、Miの調性」と「ソルミゼーションに基づく旋法型」という見方から導き出された「調的特性」に焦点をあてて考察したものである。

調性以前の多声音楽の「旋法性」という問題は、近代の研究者のみならず、当時の理論家たちによっても統一的な見解が得られていない、音楽史上、および音楽理論史上において重要な問題である。15、16世紀の主な理論書において「多声的旋法」についての共通概念は確立されておらず、また現代の諸研究も当時の楽曲を分析するための一般的な旋法概念を提示できないでいる。こうした背景から、申請者がコンペールの音楽の特性を把握するために有効なツールとして、ジャッドの分析法を採用したことは一応理解できるが、ジャッドの分類法についての説明は用意周到とは言えず、その方法を選んだ理論的根拠が十分に論証されていないところに、本論文における論述の弱さが露呈している。

申請者は、ジャッドのソルミゼーションに基づく分析方法を援用して、以下の諸点を明らかにした。(1)コンペールの世俗シャンソンにはMiの調性がないこと、(2)つまり全体はReの調性とUtの調性の2つに還元できること、(3)Re (G)の調性では曲全体の冒頭、中間終止、最終の終止でG-D-Gという5度関係、Ut (F)の調性ではF-C-Fという5度関係が楽曲の構造を形成していること、などである。ただし同時代の多声シャンソン、とくにジョスカン・デ・プレ (1450/55-1521)の作品については言及がほとんどない。従って、申請者がコンペールのシャンソンの「調的特性」として挙げている特徴も、同時代の作曲家たちによって共有されていた可能性もある。

しかし本論文は、ともかくコンペールのシャンソンについてまとめた分析結果を提示し、ルネサンス多声音楽の分析に一応の問題提起を行ったことは学術的成果と評価できる。ゆえに合格と判断した。